

空襲当夜

寺谷 美喜子

中央五丁目

空襲が始まってからは下町の被害が多く、中野はまだまだ助かっていたが次第にのべつ敵機がとび交うようになった。

当初ラジオでB 29の音を聞かす。低いうなりで無気味だったのが懸命に覚えた。昼間の空襲で敵機がとんで行くのを高射砲が迎え撃つ。しかし当たらない。もう少し前方をはじめからねらった方が等、思いながら眺めていられた。また、友軍機が追ってゆくのをハラハラしながら見たり、今思えばまだ安らかな時であった。ある夜は、北の空を西へ向って数機が行くのに対し、照明弾をうち上げた。家の北の二階から見えたが、突然真昼のように明るくなり、びっくりしたものだ。日のたつ毎に空襲はひどくなって昼も夜もなくなった。寝られないからフラフラになる。神経戦というのであろう。ふとんは敷いたまま、着のみ着のまま、いつでもとび出せるようにしていた。

東京最後の空襲は、たしか五月二五日であった。その頃、学童は集団疎開、縁故のある人は地方へ、しかしそれのない我々はどうにも動けなかった。

いざという時のための隣組での話し合いで、子供、年寄りには私が先導して避難することに決まった。

その夜けたたましいサイレンに、私は幼な子を背負い、母や隣のお年寄り等とともに毛布を持って家を出た。

中野駅方面は真つ暗だが、遠く三方は赤々と燃えている。とにかく駅に向かって歩いた。五叉路近くに来た時、飛行機がとんで行くな、と思ったとたん、北の方が真つ赤に燃え出した。四方やられた、火は風下へくる、では風上へ逃げるよりない、とすれば元への道だ。風に逆らってひき返す。大久保通りで中野と杉並の境の四つ角に来た。その辺は火はないのに飛ばされた大きなオキがくるくる舞っている。火が風をよぶ。躊躇したがいきって大またでふみ越え、前とは逆に青梅街道を渡った。我々の足では遅々とした歩みである。辺りはひっそりと静かだった。立っている人に「この辺は無事だったのですね」というと「いや、たった今消したところですよ」。もうどこも同じ。四方やられると思ったとたん、どっと疲れて、そばの石に腰を下ろ

し休む。

薄明るくなりこっちへ向かってくる人が多くなってきた。我が家の方から来たという人に聞いてみると、「ああ、あの辺は焼けました」との返事。やはりそうか、と思うのみで無感動だった。くるべくして来たのだ。時間も大分たっている、とにかく家へ戻ろう、あと始末もある、トボトボ帰る。と、あるではないか、近所すべて焼けてはいない。明けっ放しの家に入る。ふとんの上に倒れた。とたんに「空襲警報発令」の音が聞える。もう出て行く気力もない。もう出て行かずここで死のう。道で死んでは誰だか判断も出来まい。家でなら黒こげでも分るだろう。等々思いながらフーツと何も分からなくなった。その発令の報はあとで誤報と知った。当時、空襲巣ねらいは大変な刑にあうと聞いていたが、ドロボウもそんなことをするいとまもないほど、命大切の頃だったのだ。

